アオイはEDMが流れる中時々声を掛けられながら人間と人間の間をかき分けるようにバーカウンターに向かって歩いて行った。
フロアから抜けても壁には多くの人が立ったり座ったりしながら雑談をし、隣のフロアにある即売会会場では何人かの人々が商品を物色しながら雑談をしていた。
アオイは自分が主催しているクラブイベントの成功を感じながら満足げににこりと微笑むと喫煙所にいるカジュアルな服装をした長い髪を後ろで一つにまとめている一人の男に後ろから抱き付いた。
男が振り返るとその顔は驚くほどの美形で男も女も振り返るような美貌だった。
「パイモン！今日のイベント超成功しているかも！？」
「嬉しそうだね」
「そりゃあそうでしょ？」
そう言いながらアオイはタバコに火をつけると満足げにたばこの煙を曇らせた。

「だって、呼んだDJもフロアを盛り上げてくれているし、みんなすごく楽しそうにしているし。これが超成功じゃなかったら何を超成功っていうのか分からない」
「多少は不満に思っているやつがいるんじゃないのか？」
「多少の不満が発生するのはしょうがないでしょ？１００％の満足というのはあり得ないってすごい勉強したし」
パイモンはやれやれという顔をするとタバコを再び曇らせ壁にもたれかかった。
アオイはパイモンの肩につかまるとぐっと背伸びをして彼の耳元に口を近づけた。
「後は、パイモンが私に魔法をかけてくれたおかげだよ」
「なんで？」
「だって、私女子だから舐められがちになるけど、パイモンが魔法をかけてくれたおかげで全然舐められていないもん」
アオイのその言葉でパイモンは他人から一目置かれるようになる魔法をアオイにかけたのを思い出すと、「ああ」と言いながらタバコの火を消した。

「他人から一目おかれるようになると全然違うだろう？」